
第一章

祈りの準備と秩序

体験と実践

真正の祈り、本物の祈りとは欲することも命令することもできないもので、泉から迸り出る奔流のように内奥から自ずから湧き上がって来るものでなければならぬと言われるのを耳にすることが屢々あります。内奥から湧き上がって来るのでないかぎり、祈るようにと心が迫ってくるのでないかぎり、祈るということはせざるに在るのがよい、そうでないと、祈りは真正のものではなくなり、不自然なものとなってしまうから。この言葉は一見極めて説得力があるように聞こえます。けれども、人間というものを、そして人間の宗教生活というものを多少なりとも見知っている人なら、このような話し方をする人には、祈るということが本当に真剣な事柄であったことは一度もなかったのでは、との疑いを抱かずにはいられないであります。確かに、内奥から自ずと生まれ出てくる祈りはあります。たとえば、何か凄く幸せなことが起こったような時に、思わず、「おお、神さま、有難うございます」と叫び声を上げている場合などがそうでしょう。あるいは、大変な困苦が或る人を苛んでいる時に、その人に対して根っからの好意を持っておられるとともに、助け船を出せる凡ゆる権能を持ってもおられる方に目を向ける場合などもそうでしょう。時としては、人間は神の近さを極めて生き生きと実感し、思わず知らず神と語り始めているということもあるであります。あるいは、或る定めの中にあの方の聖なる統率を感じし、全く口も利けずに立ち尽くすというようなこともあるかもしれません。こういうことも起こるかもしれません。けれども、必ずこうでなければならぬと決まっているわけではありません。

定めの体験は、神への道に立ちただかる暗黒の壁の如くに思えることもありうるのです。聖なる近さという感情が完全に消え去って、その同じ人に、^{（註）}そのような近さなど一度も感知したことがなかつたがのうに思えてくるということも可能なのです。喜びは神に思いを馳せることなど全くその人にさせないこともありえますし、困苦はその人の内奥を全く閉ざしてしまうこともありうるのです。「困苦が祈ることを教えてくれる」といったような言葉は半分しか真理ではありません。困苦の中では以前はしていた祈りすらなくなってしまうということも、同じように真理なのです。

内的な衝動の中から湧き上がってくる祈りというものは、全体として見るなら、殆ど例外をなしているようにすら見えるのです。自分の宗教的生活をこのような祈りの上にしか構築しようとしない人は、おそらくは早晚全く祈らなくなってしまうでありましょう。そのような人は一切を靈感と体験に委ね、秩序、^{（註）}躰け、労働といったことは脇に置いておこうとする人のようなものでありましょう。すなわち、このような生き方は偶然というものに引き渡されてしまっていて、享乐的、^{（註）}恣意的、幻想的なものとなり、真剣さとか信頼性といったことは消え失せることになるでありません。内奥から湧き上がってくることにのみに打ち任せておこうとする祈りの場合も同じようになるでしょう。神に対する自分の関係を真剣に考えている人は、早晚、祈りというものがない、内奥のひとつ表現、それも自ずから自己を主張し貫徹してくる表現であるのみではなく、忠実かつ従順に行なうべき奉仕、勤めでもある、それも第一義的にはむしろ、このようなものでこそあることを見ることになります。したがって、祈りとは、意図的に欲しもし、^{（註）}実践もしなければ

ならないものなのです。

祈りのこの意味での実践が本書では話題になる筈のものです。この意味での実践は何よりもまず、特定の刻限に祈りをするということにあります。すなわち、毎朝、一日の仕事の開始の前に、そして毎夕、休む前に、といったようにです。その他、自分にとってためになること、自分にできること、そして自分の周囲で仕来たりとなっていることに対応することを一人ひとりの人が見極めねばなりません。たとえば、食事の前後の祈り、鐘が鳴っている際の「お告げの祈り」、仕事の前の短い心の統一、^(訳注3)道の途中にある教会の中で暫らく静かに過ごすこと、などなど。この実践、練習には、正しい姿勢も含まれます。それも外的な姿勢も、そして何よりも内的な姿勢もです。つまり、祈りを始める前の心の統一と、祈っている最中に自らに課す躰けが大切です。この実践にはさらに正しい祈りの言葉やテキストの選択ということも含まれています。黙想、ロザリオ、その他このようなさまざまな、^{いじし}古えより試し尽くされてきた祈りの形態を習得することもそうです。

この一切に当てはまる、普遍的に拘束力を持つ規則を立てることはできません。この点についてはわたしたちはもっと詳しく話題にすることになりましょう。自分のための秩序をどのようなものにするか決めるにしても——いづれにしても、誠実かつ良心的でないといけません。ここにおけるほど簡単に、わたしたちがわたしたち自身を騙して何かをやって見せることのできる事柄も、そう沢山はありません。普通は、人間は祈ることが好きではありません。人は祈り始めると

祈りの準備と秩序

すぐに退屈したり、戸惑ったり、嫌になったり、敵意を感じるようにすらなり易いのです。そうなった時には、他のどのようなことであっても、そちらのほうが魅力的となり、大切に見えてきます。その人は、時間がないとか、これこれのほうが差し迫っているなどと言うことになります。けれども、だからといって、祈りを離れるなら、その瞬間に、その人は一番どうでもよいことをすることにかなりうるのです。神をも自分自身をも欺くことを人間は止めねばなりません。このような策略を講ずるより、「わたしは祈りたくありません」と全面的にあからさまに言う方がずっとよいのです。疲れているなどといった言い訳の防壁ぼうへいの陰に身を隠すことをせずに、ストレートに「その気がありません」と宣言するほうがずっと立派です。こう言ってしまうことは、あまり聞こえのよいことではありませんし、心の發育不全が白日のもとに晒さらされることでもあります。けれども、言われていることは真実です。そして真実のことからは、隠蔽いんぺいすることからよりも遙かに容易に道は前進して行くものなのです。

ついでながら、人間は、ここで問題になっていることが真剣なことであることが分かっているといけません。人間は弱気になってはいけません。義務と必要が要求することは果たさないとはいけません。そして、難しくできそうにないと思える場合でも、自分には何かができると考えてよいのです。祈りなしには信仰は生氣のないものとなり、宗教生活は發育不全を起こします。人は、祈ることなしには、長期にわたってキリスト者でありつづけることはできません——呼吸することなしには生きていることができないと同じです。

ところで本当にそうなのでしょうか？ 祈りは実際に必要なのでしょうか？ もしかすると、

祈りとは、静かで、物の役にはあまり立たず、多少弱々しい生まれつきの人で、実生活にまとも
に溶け込めないような人の事柄なのではないのでしょうか。祈る人々の世界は、生活に長けた普
通の人間の感覚には反する不自然なもの、生気を欠いたものを含んでいるとまでは——そのよう
な経験もいくつかあることはあるのですが——言わないまでも。

この異論に含まれる正しい点については、後で話すことにします。今ここで問題になっている
のは、キリスト者がキリスト者らしく生きていくためには祈りというものは避けて通れないほど
必要なものなのかという根本的な問いです。ただし、もっと手前のところから始めて、とにかく
健康な生活という観点から必要なのではないのかと問うことも既にできるかもしれません。そ
して、そうする場合には、人間の生活において祈りといった類いのものが何も存在していない場
合は、その人間は大きな危険に落ち込むことになるかと教えている、実に注目すべきいくつかの判
断が存在しています。他でもなく、医師たちの示唆しているところによると、外に向って生きて
いるだけでしかない人、様々な印象のあいだを次から次へと引きずり回されながら、喋ったり、
励んだり、働いたり、闘ったりしているだけでしかない人は、最後には必ず自分自身を消耗し尽
くし、痙攣を起こして硬直状態に陥ることになります。そうならないようにするには、生き方も
内へと逆の方向をとらねばなりません。生活は根本から自己を変革し、エネルギーを集中し、緊
張を獲得しなければなりません。医師たちはさらに、近代人は、人格の構築にあたってその支え
となり、生活の進行に方向性を与える内的な中心を日を追って益々喪失していつている、とも言っ

ています。彼ら医師たちによれば、近代人は言葉では極めて大きなことを言い、これほどまでも声高に自己主張をしているにも拘らず、確信を喪失していて、その自信に満ちた営みの下には、ますます脅威の度合を増している不安が出番を窺っているのです。ですから近代人は、内的な中心、担い確保してくれる支え、自分が世界へ出ていくための出発点となるとともに、常にそこへと帰って来ることのできるそのポイントを求め探さねばならないのです。

この一切を獲得するためには、週末に、あるいは休暇の際に自然を訪れるといったことだけでは足りません。旅行とか休暇とかいった人間の営みによって、この「自然」も益々その本来の刻印〔性格〕を喪失していつているという点は全く度外視するとしても、海辺や山の中での滞在が与えてくれることのできるものは十分なバランスにはなりません。それは身体的精神的な力づけを与えてはくれますが、そこで得たエネルギーなど早晚再び消耗してしまいます。必要とされているものは、常に作用しつづける真正のバランスであります。ところで、このバランスは単に「精神的」でしかないものだけでも駄目です。詩作、音楽、造形芸術などは、哲学とか、これに類するものと全く同じように十分ではありません。この一切が医師たちには分かっています。ただし、人が何をしたらよいのかとの問いに対する答えは、大抵の場合は彼らにも分かっているではありません。彼らが何らかの答えを知っているところ、そこではその答えは、何らかの意味で宗教的な基礎付けのある心の統一、潜心、黙想——ということとはつまり或る種の祈りということですが——を実践してみるようにといった方向をとることになります。ところで信仰の確信が欠落しているところでは、これらのことをすることは困難です。というのは、祈りが助けになるのは、祈り

のご利益の故ではなく、神との内的な間柄に発してその実践がなされる場合のみだからです。従って、既にこのような間柄にある人々がこの間柄を維持していくということも、どれほど大切なことでありましょうか。とはいえ、一見弱々しいと見えること、あるいは世間的には不器用と見えることとの関わりで言うなら——先の非難に含まれる正しい点については、述べたように、まだ言及せねばなりません——、真正の祈りには謙遜ということも属しています。ただし、謙遜とは弱さではなく真実ということです。聖なる方の稜威^{みい}に見合うセンスを欠いている力、あの方での遜りを欠いている力は全くの実りなきものです。精神的に健康でありつづけるために、人間は祈りを必要としています。ただし、生き生きした信仰にもとづかずには人間は祈ることができません。ところが逆に、——そしてこのことをもって輪は閉じるのでもありますが——その人の信仰が生き生きとしつづけるのも、その人が祈っている場合のみなのでもあります。というのは、祈りとは、信仰には何ら影響を及ぼすこともないままに、実践したり、しなかったりすることのできる行ないではなく、信仰の最も基礎的・元素的な発言なのです。すなわち、信仰が向っているその当の神様との交わりなのです。祈りが滞ってしまうような時期があることもあるかもしれませんが。しかし、長期にわたっては、祈ることなしには信じていることはできません——ちょうど、呼吸することなしには生きていくことができないと同じようにです。

ここで再び呼吸という考えが出てきます——この考えはいま述べたばかりのことと矛盾するのではないのでしょうか？ 生命はもちろん呼吸なしには存立しつづけることはできないでしょう

う。それ故にこそ、呼吸はその静かな、しかも決して停止することのない進行を必然的に行なうていくのであって、意図的に欲したり実践したりすることも不要なのです！ そうは言っても、これが正しいのは半分だけです。というのは、荒れるに任された呼吸、健全な発育をしていない呼吸、病んでいる呼吸もあることをわたしたちは知っていますし、呼吸を強靱にしたり治療したりしないといけないといった状況に人間が容易になることができるということをも知っているのですから。しかもそれは、どのようにして呼吸を実践しないといけないのかということと殆ど同じことなのですから。けれども、この点はこのままにしておきましょう。そして、心臓が自ずから打っているように呼吸が基本的には自ずから進行していることも認めておきましょう。けれども、呼吸というこのイメージは、わたしたちが、いま話題にしている呼吸がどの生命に属しているのか、そしてこの生命がどのようにできているのかをよく考えてみると、初めてその正しさを手に入れることになるのです。

信仰は、わたしたちの古いほうの第一の生命の中において、第二の、新しい生命が神によって目覚めていると言っています。この生命は芽のようなものであって、自らを展開させていく筈のものです。つまり、この生命は全ての生きているものがその始まりにあってはそうであるように、弱く、傷つき易く、不確かなものです。古いほうの生命がその上にのしかかってまいりますし、上から押さえつけてもいますし、隅のほうへと追い詰めてもいますし、惑わせてもいます。わたしたちの直接的な感覚と知識を充たしているほうの生命は、自らの身体的靈的必要性を伴った自然的人間に属していて、格別のことをしなくても自己の主張を貫徹していきます。それに対して、

もうひとつのほうの生命は隠れています。経験領域の中にまで進出してくることは稀にしかなく、わたしたちは信じなければなりません、世話もしなければならぬものです。そこから、わたしたちがこちらのほうの生命の心配をしない、そして古いほうの生命によって押しつぶされるに任せておくといった大きな危険が存在しています。そしてその場合には、自然的な呼吸のほうは力強く進行しているのに、隠れたほうの、聖霊から来ているほうの呼吸はますます弱くなっています、そして或る時本当に止ってしまふということにもなりかねません。新しい内的な生命は、子供の繊細な生命がその子の母親の手の中に与えられるにも似た仕方です、あるいは危険に曝されている生命が介護者の手の中に託されるにも似た仕方です、わたしたちの手の中に神によって与えられているのです。ですから、わたしたちは、この生命がわたしたちにとってどれ程の価値を持っているのかと自ら問わねばなりませんし、そこからいくつかの結論を引き出すこともしなければなりません。わたしたちは、この生命を維持し発展させるために必要なことをすることに致します。わたしたちは、宗教的事柄における内的な真正さと誠実さについて、さまざまな語り口に惑わされることのないようにし、真理が——神の言葉の真理と、この真理によって明らかにされ勇気付けを得て、人間的経験の真理が——わたしたちに薦めることを実行していくことにします。

準備の必要性

宗教的事柄における人間の姿勢は人を不安にさせるほどの矛盾を孕んでいます。人間は神を

必要としている。人間には、そのことが分かっている。自分を創造された方であり、自分がいま生きているのもその方の権能の故であるその当の方を求め探してもいる——ところが、その同じ人間が、これほどの結び付きについて全く何も知らうとはせず、神を避け、神に抗おうとしつづけてもいる。この矛盾は祈ることと人間の間柄においても示されています。人間が祈りという聖なる奉仕、勤めを受諾し実行するや否や、その人は真理を実感し、気分も良くなります。それにも拘らず、人間は祈ることができるところでも、祈ることは避けて通るのです。人間がそうするには沢山の理由があります。しかし、何よりも、神を知覚していない、もっと正確に言うなら、事物や人間を知覚している仕方では知覚していないということがその理由です。世の事物や人間たちは現にここに立っている、近づいてくる、働いている、行動している。そして、これらのものは直接に触れてくる、五感がそれらのものを捉えている、欲動と意志が答えています。ですから、これらのものとの交わりは自ずから始動していくことにもなります。神はもちろん現実に存在しておられます。それも、どの事物よりも現実的に実際に現にここに存在しておられます。けれども、その存在は露になつてると同時に覆われてもいます。あの方を見るのは信仰の眼です。あの方を経験するのは愛している心です。ところが、この眼には屢々ベールが掛かっていますし、心は屢々鈍感になっています。そうなつているとき、神については人は経験するということもなければ、勤が働くということもありません。そのような場合には、あの方との交わりはただ忠実のみにもとづいて、それも一見暗闇で空虚と見えるものの中へと向けてなされねばならないことになります。これは極めて骨の折れることになります。人間は神に起因して生きているのに、